

ドンマイ!!

茜川オダマキーズ

(第四話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン

海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン

早田里菜―前同・一塁手

桐林沙月―前同・三塁手

龍野季穂―前同・遊撃手

城内美青―前同・監督

麓飛鳥―前同・中堅手

本村香苗―前同・左翼手

水上小夜―前同・右翼手

杉崎寿音―前同・投手

皆川悠希―前同・投手

園内裕美―スーパーマーケット・パート従業員

若本珠代―茜川高校・現代文教師

早田真耶―里菜の姉

井川譲吉―沙月の叔父

祥子―沙月の叔母

桐林優花―沙月の妹

龍野研造―季穂の父

静海―季穂の母

真斗―季穂の弟

片平―モデル事務所マネージャー

佐野和樹―真紀の彼氏

権藤凜子―朝霞学園女子野球部監督

○茜川高校・小運動場

練習をしているオダマキーズ。真紀を相手に投球練習をしている寿音。寿音にフォームの指導をする裕美。練習の様子を見守っている珠代。

制服姿の女子生徒、皆川悠希がバックネット裏少し離れたところの路上から練習を見ている。

ベンチに座りノートをとっていた美青が悠希に気づいて。

美青「若本先生」

珠代「なに」

美青「皆川さん、また練習見えます」

珠代「え——あ、ほんとだ」

美青「入りたいのかな、やっぱり」

珠代「訊いてこよっか。入りたいって言ったら？」

美青「断る理由なんてありません」

珠代「ん、わかった」

美青「あ、わたしも行きます」

悠希のところへ向かう珠代と美青。

○前同・路上

じつと練習を見ていた悠希。立ち去ろうとする。そこへ珠代と美青。

珠代「皆川さん」

悠希、振り向いて珠代と美青を見る。

美青「前も練習見てたよね」

珠代「入りたいの、皆川さん」

無言で軽く会釈をして背を向ける悠希。

美青「先生」

珠代「なに」

美青「皆川さんが朝霞から転入してきた理由は？」

珠代「——それは個人情報だから、言えないの」

美青「ですよね」

去っていく悠希の後ろ姿を見つめている二人。

○前同・学生食堂（日替わり・昼休み）

賑わっている学食の中、固まって座っている真紀、美青、知慧、香苗、小夜の五人。

小夜「じゃあ美青は皆川さんが朝霞で野球部だったって思ってるの?」

美青「うん。なんかそんな気がする」

小夜「で、チームに入りたいって?」

美青「それは、分からないけど……うん、なんかそんな気がする」

香苗「じゃ、訊けばいいんだよ」

立ち上がる香苗。

香苗「皆川さん、いつも昼休み自分の席に座ってボーっとしてるからさ、わたし訊いてくる——個人情報とかさ、そんなのぼっか気にしてたらなんにもできないよ」

立ち去る香苗。啞然としている四人。

真紀「よし。じゃ、ここは香苗に任せよう」

知慧「本当はキャプテンのあなたの役目だけどね」

真紀「もう、いいじゃんか」

知慧「……ほら、行ってきなよダーリンのところ」

真紀「——うん、じゃ、ちょっと」

立ち上がり離れた席で友人たちと食事をしていた和樹のところへ行く真紀。その隣に座る真紀。楽し気に話しを始める二人。

知慧「嘘でも『別にいいよ』とか言ってから行けないものかね、あの女は」

小夜「確かに」

笑う三人。

○前同・二年五組・教室

窓際の席に座り、外を見ている悠希。そこへやってくる香苗。

香苗「皆川さん」

香苗を見る悠希。

香苗「練習、見てくれてたんだって」

微笑んでいる香苗。

○前同・廊下（放課後）

並んで歩く香苗と悠希。前を歩く知慧と小夜に気づく香苗。

香苗「知慧ちゃん、小夜ちゃん！」

振り向く二人。

香苗「わたし、今から皆川さんと図書室で話しするから。今日練習出るの遅くなるってみんなに言っといて」

二人の横を過ぎていく香苗と悠希。その後ろ姿を見送る二人。

知慧「香苗ってさ」

小夜「うん」

知慧「なんかスゴくない？」

小夜「うん、スゴい」

後ろからやってくる真紀。

真紀「どしたの？」

二人、真紀を見て。

知慧「全然スゴくないのが来た」

小夜「うん」

真紀「なによそれ」

真紀を見て笑う二人。

○前同・図書室

閑散とした図書室。大机の前の椅子に並んで座っている香苗と悠希。

香苗「べつに、話したくなかったら話さなくてもいいよ」

悠希「え」

香苗「わたし、ずっと友達いなかったんだ。だから、同じクラスの子と、二人きりでいるだけでもすごく嬉しかったりする。皆川さんには迷惑かもだけど」

悠希「友達、いなかったの？」

香苗「うん、ずっと。でもオダマキーズ入って、フライ捕った瞬間になんか変わっちゃったの。目覚めちゃったみたいなんだ」

悠希「目覚めたのか」

香苗「うん、目覚めたの」

笑いあう二人。

悠希「わたしね、朝霞の女子野球部にいたの」

香苗「やっぱり」

悠希「中学のときはソフト部でピッチャーだった。野球がやりたくて、朝霞のセレクション受けて合格した。そこでもピッチャー。

補欠の四番手だったけど。岡坂さんが凄かったから」

香苗「あのピッチャーね……あ、わたしたち朝霞と試合したことがあるんだけど、その時は？」

悠希「見てない。レギュラーだけ行ったからあの試合。たぶん、デートしてたと思う」

香苗「デート？」

悠希「彼氏いたから、わたし。茜川商業のイッコ上」

香苗「そうなんだ」

悠希「でも、ばれちゃった」

香苗「ばれたって？」

悠希「男女交際禁止なの、朝霞の女子野球部って」

香苗「はあ？ なにそれ。あの監督が決めたの？」

頷く悠希。

悠希「野球部の誰かがチクったんだと思う。雰囲気あんまりよくないんだあの部。試合のときだけまとまるっていうみたいなの」

香苗「それで？」

悠希「うん」

●インサート・悠希の回想 朝霞学園・体育教官室

椅子に坐っている凜子の前に立っている悠希。凜子、手にした手紙を小さく振りながら。

凜子「じゃ、ここに書いてあることは本当だと認めるわけね？」

悠希「——はい」

凜子「いつからおつきあいしてるのお、茜川商業の男子生徒とは」

悠希「中二のときからです」

凜子「へーえ、早熟ねえあなた。てことは最初からだましてたんだ、

わたしのこと」

悠希「だますって」

凜子「だってそうでしょ、わたしセレクション終わっての入部説明会のとくにちゃんと言ったわよ、うちの部は男女交際禁止だって。それを分かって入ったんだから、あなたはわたしをだました。ちがう？」

うつむく悠希。

凜子「規約違反よ。退部しなさい」

悠希「そんな——」

凜子「それが嫌ならその男子生徒との交際をやめること。そして部員全員の前で謝罪すること。それができたら部に残ってもいいわ。どう？ 親心よ」

唇をかみしめる悠希。

(回想場面・終わり)

香苗「それで、どうしたの」

悠希「部、やめた。謝るのなんて嫌だったし。わたしなにも悪いことしてないのに」

香苗「うん、そうだよ」

悠希「それに、続けたって、嫌がらせされたりするのわかってたし。けっこう酷かったよキャッチャーの白石さんとか。補欠のわたしたちパシリにしたりしてたんだ」

香苗「そっか、じゃ彼氏とったんだ」

悠希「うん——でも、別れちゃった」

香苗「え、どうして」

悠希「同じクラスの同級生好きになっちゃったんだって。ふられちゃったの、わたし」

香苗「……」

悠希「野球部もやめて、彼にもふられちゃって。なんか、なんかもやる気なくしちゃってさ。学校もあんまり行かなくなっちゃったよ」

香苗「うん」

悠希「野球部の子たちや監督と顔合わせるの嫌だったし。だからもう学校やめようって。それに、あそこ学費高いから、休んでばっかなのに通うのは親にも悪いじゃん、やっぱ」

香苗「それでこっち転入か」

悠希「うん。高校だけは出ておきたかったから」

香苗「——ね、今でもその彼氏だった人のこと好き？」

首を横にふる悠希。

悠希「最初は寂しかったけど、今はもうなんとも思っていない」

香苗「そっか。じゃあ野球は？」

悠希「え」

香苗「野球のことも、なんとも思っていない？」

じっと香苗を見つめる悠希。やがて首を横に振る。

香苗「小運動場、行ってみない？」

小さく頷く悠希。

○前同・小運動場

悠希を連れて入ってくる香苗。オダマキーズの面々が裕美、珠代を中心に盛り上がっている。

飛鳥「あ、香苗！ また朝霞とやれるよ！ それもタイトル賭けて！」
香苗「え、どういうこと」

輪の中に入る香苗。手にしていたプリントを見せる美青。

美青「この地域の草野球チームが六月からカップ戦始めるの。そこにわたしたちも参加することになったの」

香苗「カップ戦？」

美青「うん。まず全40チームを8つのリーグに分けて総当たりの四試合やる。そこで一位になったチームがトーナメント戦をして優勝を決めるの」

香苗「そこにわたしたちも？」

珠代「フレッシュボイスの監督から学校に連絡があったのよ。みんなの意見訊いてからって返事しといたけど、全員参加したいって。本村さんは？」

香苗「もちろんですよ。じゃあ、そこに朝霞も」

珠代「ええ。女子野球の関東予選もあるけど、参加するんだって」

美青「朝霞はきつと勝ち上がってくる。だからわたしたちもリーグ戦勝ち抜いて、決勝トーナメントで朝霞ともう一回やる」

香苗「——なんかそれってすごい。あ」

悠希を見る香苗。誰も。

香苗「皆川悠希さん。去年まで朝霞の女子野球部でピッチャーだったの」

真紀「朝霞でピッチャー……すご」

香苗「バカみたいな理由で野球部やめることになって、朝霞もやめた——皆川さん、聞こえたてた？ いっしょに朝霞倒そうよ！」

しばらく真紀たちを見ている悠希。

やがてうなずく悠希。オタマキーズの輪へと近づいていく。

○前同・小運動場（日替わり）

美青、裕美、珠代、三人の前に寿音と悠希が立っている。（あとのメンバーはランニング中）。

美青「寿音と皆川さんのダブルエース、ダブルリリーバー体制でいきます」

寿音「どういうこと」

美青「試合によって先発とリリーフを入れ替えるの。二人とも試合には必ず出るって思ってた」

悠希「あの、わたし」

美青「なに」

悠希「ピッチャーだったけど、杉崎さんみたいに速い球投げられないし、べつにピッチャーにこだわってるわけじゃ……」

美青「速い球投げるだけが能じゃないわ、ピッチャーは。ですよ、園内コーチ」

うなずく裕美。

美青「リーグ戦勝ち上がって決勝トーナメント勝ち抜くには絶対ピッチャーは二枚必要。それに、ピッチャーとして朝霞とやってみたくない、皆川さん」

悠希「え——」

うなずく悠希。

寿音「殺し文句だ」

美青「ふふふ」

裕美「フォーム、変えてみようか」

悠希「フォームを」

裕美「うん。練習みてたらあなたすごく体が柔らかい。その体に合ったピッチングフォームに変えたい。ええね」

悠希「——はい」

珠代「権藤監督にはそんなこと言われなかった？」

悠希「はい、一度も。あの岡坂さんにつきっきりだったんで」

珠代「『あの人』か」

悠希「あ、すみません」

珠代「いいの別に。話しきいてりゃ『あの人』で十分だ」

美青「じゃ、二人ともみんなといっしょにランニング」

一周回するチームに合流する寿音と悠希。

美青「コーチ」

裕美「なに」

美青「二人の持ち味を最大限生かすご指導をお願いします。柔の皆川、剛の杉崎、みたいな感じで」

裕美「——あんた、ほんまにええ監督さんやね。朝霞の監督より立派やわ」

美青「あんなのといっしょにしないでください」

珠代「今度は『あんなの』になった」

美青「あんなので十分です、あんなの」

珠代と裕美が声を上げて笑う。小運動場を走り続けているオダマキーズの面々を目で追っている美青。

○前同・小運動場

〈以下、オダマキーズの練習風景が諸々描写される〉

●ピッチングマシン二機を荷台に結わえ付けた軽トラを運転してやってくる譲吉。盛り上がるオダマキーズ。

●ピッチングマシンの球を打つ飛鳥と季穂。声をかけながら順番待ちをしているオダマキーズ。

●悠希に下手投げのフォームを教えている裕美。投げてみる裕美。球は大きくキャッチャー真紀の頭上へと。頷いて再度指導をする裕美。

●投げる寿音、走る一塁ランナーの沙月。捕ると同時に二塁に投げる真紀。送球を受ける知慧。滑り込む沙月の足にタッチする。アウト。ガッツポーズの真紀と知慧。

●内野陣にノックを打つ裕美。誰もが上手く打球を捌く。

●外野ノックを打つ裕美。難なくキャッチを繰り返す外野の香苗、飛鳥、小夜。

●十人が横並びに立っている。ホイッスルを吹く美青。ダッシュする十人。再び美青のホイッスル。ターンをする十人。ダッシュ。美青のホイッスルに合わせてターン&ダッシュが繰り返される。

●マウンドに立っている悠希。華麗なフォームのアンダースローか

ら、糸を引くような球が真紀のミットに収まる。笑顔の悠希。

○早田家・早田家・里菜の姉、真耶の部屋の前

廊下に座り壁に背をもたせかけ、部屋の扉に向かって話をしている里菜。

里菜「——でね、悠希はアンダースローで投げられるようになったの。すごくきれいなピッチングフォームだよ。裕美さんや美青に教えてもらってシンカーってボールに挑戦してる。真紀がたいへんだよ、寿音の剛速球の次は悠希の変化球。でも真紀なら大丈夫だよ。あの子ああ見えて根性あるもん。知慧に怒られながら半泣きで頑張ってるよ——ねえ、お姉ちゃん。わたしね、内野の連携練習が大好きなんだ。ダブルプレー想定しての練習。6・4・3、4・6・3、5・4・3、2・4・3、1・4・3。いろいろあるの。3つていうのがわたし。わたしが捕ってダブルプレーが成り立つの。美青が言うんだ。『前の二人が繋いだ心を里菜がしっかりと受け止めてダブルプレーが決まるの』って。すごいよ、ほんとすごいって思う美青は。響くん、あの子の言葉って。ねえお姉ちゃん、いよいよカップ戦が始まるの。頑張るよわたし。頑張つて、リーグ戦勝ち抜いて決勝トーナメント行って、朝霞とやるんだ、絶対」

部屋の中で物音がする。

里菜「え——」

ドアが開き、真耶が出てくる。

里菜「お姉ちゃん……」

真耶をじっと見つめる里菜。

真耶「試合、観にいくね」

真耶に抱きつく里菜。

里菜「うん、うん……」

真耶、抱きついた里菜の髪を優しく撫でていく。

○河川敷のグラウンド

〈TⅡ対ミリオンダラーズ〉

スコアボードは7対1でオダマキーズのリード。ラストバツターを三振にうちとる悠希。

悠希「よしっ！」

ガッツポーズの悠希のもとへ駆け寄る笑顔の真紀。

ベンチにいる美青、寿音、裕美、珠代。

裕美「まずは一勝、おめでとう監督」

美青「はい——でも、反省点多いです。特に出会いがしらの一発には気をつけてね、寿音」

寿音「はい。あー、耳が痛い」

珠代「勝って奢らず。ほんとにいい監督だ城内さんは」

笑顔のメンバーが戻ってくる。

× × ×

にぎやかに後片付けをしているオダマキーズ。そこへやってくる凜子。

挨拶もせず凜子を見るオダマキーズ。

凜子「なによその顔は。わたしたちだって向こうのグラウンドで試合してたのよ。気づいてなかった？」

美青「なにか用ですか」

凜子「相変わらずのご挨拶ねえ。茜川高校女子野球同好会の結果が気になったからわざわざ来てあげたんじゃない。どうやら勝ったみたいね」

美青「そちらは？」

凜子「負けるわけじゃない。補欠主体のチームで10対0よ。チームの底上げの為に参加したんだけど、あんまり意味がなかったかもね——あら」

悠希に気づく凜子。小さく会釈をする悠希。

凜子「茜川に転入したって聞いたけど、また野球始めたとは知らなかった。今日試合には？」

悠希「五回から投げました」

凜子「ふーん。ま、頑張つて」

チームの面々を一渡り見渡してから、背を向け立ち去ろうとする凜子。数歩歩くが立ち止まる。向き直る。裕美の顔をじっと見つめる。

凜子「あなた、あなたまさか……」

裕美に詰め寄る凜子。

凜子「あなた、大阪の銀嶺学園にいた園内教諭よね」

無言の裕美。

凜子「答えなさい！」

裕美「——だったら」

凜子「なんでこんなところにいるの！ここで何をしているの！」

珠代「ちょっと、なんなんですか急に」

凜子「黙ってて！この女に何をしているのか訊いてるの！」

珠代「園内さんには女子野球同好会の外部指導者としてこの子たちにコーチをしてもらっています。それがなにか」

凜子「外部指導者あ？……あなた、あなたよくあんなことしておいて、また子供にものを教えるなんてことができるわね！あなたたちは知ってるの！？この女が教え子と何をしたか！知ってるの！」

季穂「ギャンギャンうるさいなあ。あんたよりはよく知ってるつもりだよ」

凜子「分かかって……何を考えているのあなたたちは！（珠代を見て）

あなたが顧問ですか！」

珠代「そうですが」

凜子「あなたも知ってるの！？」

珠代「何をです」

凜子「この女が教え子と淫らな交際をして懲戒免職になったことを

よー」

珠代「それがどうかしましたか」

凜子「あなたねえ……」

珠代「当該生徒の父兄から被害届けなどは出ていません。その上で園内さんは教職を離れました。社会的制裁は受けられていません。以降は何をしようが彼女の自由です。違いますか」

凜子「そんな理屈が通るわけないでしょう！ このふしだらな女は教師の、女子野球の面汚しよ！」

美青「もうやめて！」

叫ぶ美青。

美青「お願いです。もうやめてください」

頭を深く下げる美青。その頭を上げさせる珠代。

珠代「先生、今の取り消してもらえますか」

凜子「はあ？ 今のって？ 何を取り消すって言うのよ」

凜子を睨みつける珠代。

珠代「分かりました。もう結構です。帰ってください」

凜子「言われなくたって帰るわよ！ こんな女と同じ空気吸うだけでも汚らわしいわよ！」

去っていく凜子。

裕美を見るオダマキーズの誰も。

裕美「なに？ 心配してくれてるん？」

笑みを浮かべる裕美。

裕美「これくらいでいちいち凹んでるタマやったら、教え子とつき

あったりせえへんわ」

珠代「みんな、いい」

珠代を見る誰も。

珠代「辱めを雪ぐと書いて雪辱と言います。園内コーチの受けた辱めは、あの監督のチームに勝つことであなたたちが雪ぎなさい。いいですね」

珠代を見つめる誰も。

珠代「おら、返事はあつー！」

オダマキーズ「はいっ！」

珠代「はらわた煮えくり返ってんのよ！ 負けは絶対許さないからね！」

オダマキーズ「はいっ！」

怒りの形相の珠代を苦笑して見る裕美。

○ヘアドラーブル〈店内

【TⅡ一か月後】

カウンター席に座ってペペロンチーノを食べている沙月。その隣で宿題をしている優花。

カウンター内にいる様子と讓吉。讓吉、腕組みをして沙月を見つめて。

讓吉「沙月、明日は本気でいくからな」

沙月「は？」

○龍野家・ダイニングキッチン

食卓を囲んでいる龍野家。研造、箸を止め季穂を見つめて。

研造「季穂、明日は本気でかかってこいよ」

季穂「は？」

○ヘアドラーブル〈店内

讓吉「勝った方が決勝トーナメントだ。手抜きはしない。明日の試合に限っては叔父でもなければ姪でもない」

じつと讓吉を見る沙月。

○龍野家・ダイニングキッチン

研造「勝った方が決勝トーナメント。手抜きはせん。明日の試合だけは父でもなければ娘でもない」

じつと讓吉を見る季穂。

○ヘアドラーブル〈店内

優花、讓吉を見て。

優花「讓ちゃん、すごいね」

讓吉「何がだ」

優花「勝てるのか思ってるんだ」

讓吉「なっ……」

黙々と食事続ける沙月。笑いをこらえきれない様子。

○龍野家・ダイニングキッチン

真斗「お父さん」

研造「なんだよ」

真斗「——いい、やっぱり」

研造「なんだよ、気になるじゃないかよ、言えよ」

真斗「いい。お父さんきつと傷つくから」

研造「……どうということだよ!？」

黙々と食事続ける季穂。笑いをこらえきれない静海。

○河川敷のグラウンド

オダマキーズとフレッシュボイスの試合。

打ちまくるオダマキーズ打線。

スコアボード、一回表オダマキーズにへ5。

ひとりの若い男、片平（27）が試合を見ている。小夜にじつと視線を注いでいる。

片平「いた、いたよ……」

一回裏フレッシュボイスの攻撃。悠希、華麗なアンダースロ

ーから変化球を駆使して三者連続三振。

二回表もオダマキーズ怒涛の攻撃。縦横無尽に塁間を走り回る彼女たち。ヒットを打つ小夜。一塁塁上で笑顔を見せてベンチにピースサインをする。

片平「ダイヤモンドだ……」

スコアボードにへ4。

二回裏、ピッチャー替わって寿音。剛速球で相手打線を手玉にとり、これも三球三振。

三回表。塁を埋めているオダマキーズ。打席には飛鳥。

フルスイングした打球は外野手のはるか頭上を越える満塁ホームラン。高々と手を挙げながら塁を回る飛鳥。沸き上がるオダマキーズベンチ。

スコアボードにへ6。

三回裏。

主審「(フレッシュボーイスベンチに) えー、大会規定によりこの回5点取れなければコールドゲームです——オジサンたち、がんばってください」

譲吉「いちいち言われなくても分かってる!」

いきりたつフレッシュボーイスのメンバー。マウンドの寿音は余裕綽々といった感じ。

あつという間に二者三振。ブルンブルンとバットを振りながら打席に入る研造。

季穂「タイム」

三塁塁審にタイムを告げ、マウンドに行く季穂。寿音と話す。

笑って頷く寿音。

寿音「アンパイアさん、投手交代。サードがピッチャーでピッチャーがサード。(ベンチの美青を見て) いいよね、監督!」

笑って頷く美青。

研造「なんだとおっ!?!」

サードの守備につく寿音。マウンドに立つ季穂。

真紀「季穂、投球練習は?」

季穂「いいよそんなの。すぐ終わらせちゃうから」

研造「親をなめやがってえ……」

季穂をにらみつける研造。

季穂「なめてますけど、なにか?」

振りかぶり投げる季穂。研造、バット一閃——力ない打球が

ほぼ真上に打ち上がる。

研造「あ……」

落ちてくるボールを難なくキャッチする真紀。

真紀「ほんとにすぐ終わっちゃった」

主審「ゲームセット！ 15対0で茜川オダマキーズの勝ち！」

がっくりと膝に手をつく研造。笑顔でナインが戻ってくる。

× × ×

片付けを終え、グラウンドを後にしようとするオダマキーズ。

片平がグラウンドに入ってきて、小夜の前に立つ。

小夜「はい？」

片平、名刺を差し出す。

片平「あの、わたし、こういうものです」

小夜が受け取った名刺に「ソフィアプロモーション 片平浩

之」とある。

小夜「あの」

片平「わたし、モデル事務所でマネージャーやっています——あので

すね、いきなりなんですけどね。来週のファッションショーに出

てもらえませんかでしょうか」

頭を下げる片平。オダマキーズナインが集まってくる。

飛鳥「どしたの？」

小夜「いや、話が見えない」

片平「ホント、突然すみません。うちの事務所、モデルが三人いた

んですけど、みんな大手に引き抜かれちゃって。一人、来週のシ

ョーに出る予定だったんですけど——だから、もうホント困っち

ゃってて」

飛鳥「で？」

片平「うち、社長とわたしと事務員の三人でやってる小さいモデル

事務所なんです。で、所属の子みんななくなっちゃって。もう

どうしようもなくなっちゃって。昨日ね、社長と二人で朝まで飲んでたん

ですよ。『おまえ、もう次の仕事探せ』とか言われちゃって。もう

そうした方がいいのかなって。そしたらアパートに帰ってる途中で野球やってるの見て。わたし、高校の時野球部だったんです。そしたら、そしたら——」

飛鳥「で、小夜を見たよ」

うなずく片平。

片平「次のショー穴開けたりしたら、もうほんとに事務所畳まなきゃならないかもしれない——スカウトもやってるんだけど、うちみたいな小さなところ、全然相手にされなくて、もうホント、あきらめてたんだけど……」

香苗「で、小夜ちゃんにズキユンときたと」

大きく頷く片平。

片平「次のショーだけじゃない。演技勉強したら、あなたは女優としてだって踏み出せる。それほどの逸材だ！ ぼくの目に狂いはない！ お願いです、来週のショーにうちのモデルとして出てください！ お願いします！」

深く頭を下げる片平。

飛鳥「とか言ってるっしやいますけど」

小夜「——ごめんなさい。わたし、そういう話、今までもあったけど、みんなお断りさせていただいてるんです」

片平「だめですか」

小夜「はい」

片平「どうしても」

小夜「ごめんなさい」

片平「——そうですか」

肩を落として去りかける片平。

美青「やったら？ 小夜」

小夜「美青」

美青「今しかできないことってあるよ。お母さんが絶対ダメって言うってるとか？」

小夜「ううん、逆。やってみたらどう、なんて言ってるんだけど」

美青「じゃ、なんで」

小夜「モデルとかそういうの、自意識過剰みたいでイヤっていうか」

飛鳥「控えめな美少女とか、逆に嫌味ったらしいんですけど」

笑う誰も。

知慧「はい、じゃあ決を採ろう。小夜がファッションショーに出て、モデルになって、女優デビューとかしちやったらいいんじゃない？ とか思ってる人！」

誰もが手を挙げる。

小夜「みんな——」

片平に向き直る小夜。

小夜「詳しいお話を聞かせてもらえますか」

片平「はい！ はい！ 喜んで！ やった！ みなさん、みなさん、ありがとうございます！ あなたは必ず羽ばたける！ ボクはダイヤモンドを見つけたんだ！ やった！」

ガッツポーズをしながら小躍りする片平を見て笑うオダマキーズ。

○ファッションショー会場

少女たちでいっぱい会場。その中にかたまって立っている小夜以外のオダマキーズ。最新のファッションに身を包み、笑顔でランウェイを歩いてポーズを決めるモデルたち。そのたび少女たちから歓声が上がる。

小夜が現れる。

真紀「来たっ！」

緊張の面持ちで小夜がランウェイを歩き始める。いつせいに小夜の名前を叫ぶ真紀たち。気づく小夜。手を振る。笑顔をみせる。立ち止まりポーズを決める小夜。

真紀「サイコーっ！」

知慧「かわいいーっ！」

また真紀たちに手を振りながらランウェイを帰っていく小夜。

香苗「小夜ちゃんっ！」

チナミ「ねえ、今の子と友達？」

香苗の隣でシヨーを見ていた少女三人組の一人が声をかける。

香苗「え、うん。同級生」

チナミ「へえ。メツチャかわいいじゃん」

キミカ「うん。今まで出てきた中で一番だよ」

ミキエ「サヨっていろいろの？」

香苗「うん。水上小夜。小さい夜って書いて小夜」

チナミ「へーえ。名前も超かわいい」

香苗「シヨーとか、よく来るの？」

キミカ「うん。たまに」

香苗「小夜のこと、応援してあげてね」

ミキエ「もちろんじゃん。いっぺんでファンになっちゃったよ。あの可愛さはヤバイ」

香苗「でしょ、でしょ！」

少女たちと楽し気に話す香苗。

○ファッションシヨール会場・外

三人の少女たちと携帯電話を手にして話をしている香苗。

少し離れたところでその様子をみている真紀たち。三人に手

を振り真紀たちのところへ駆けてくる香苗。

香苗「ごめんごめん。チナミちゃんたちとメルアド交換してたんだ。

『小夜ちゃん絶対有名になるからサインほしい』だって。頼まなき
ゃ」

香苗をじっと見る真紀たち。

香苗「ん？」

季穂「——いや、うん。いいよ。香苗」

沙月「うん、いいわ」

香苗「え。なにそれ」

美青の携帯が鳴る。手に取る美青。

美青「小夜からだ」

知慧「なんて？」

美青「『今日は来てくれてありがとう！ 最初はすごく緊張したけど、みんなの顔見たらリラックスできて、あとは楽しいばかりだった！ 美青、背中押してくれてありがとう！ わたしオダマキーズもモデルも頑張ってみる！』——だって」

里菜「小夜だったら、ほんとに女優とかになって有名になっちゃうかもね」

飛鳥「うん。マジでそんな気がするわ」

真紀「じゃあ、やっぱりわたしも早いところサインもらっとかないきゃ」

知慧「有名になったとたんにヤフオクとかに出すんじゃないの、あんた」

真紀「そんなことするわけないでしょ！」

笑いがおきる。

真紀の携帯が鳴る。開く真紀。

真紀「小夜だ」

知慧の携帯も鳴る。里菜の携帯も鳴る。誰も携帯電話の着信音が次々と鳴る。携帯電話を開いて画面を見ながら、誰もが微笑んでいる。

○茜川高校・小運動場（日替わり）

炎天下。ベンチに座ってアイスクャンデーを食べている飛鳥、香苗、小夜。

飛鳥「あっちい」

香苗「ね」

小夜「アツはナツいもんだよ」

飛鳥「なにそれ」

小夜「社長がこの前言ってたの」

飛鳥「超オヤジギャグ」

香苗「あははは、なんかそれ面白い」

飛鳥「小夜、お仕事の方は？」

小夜「明後日、初めて雑誌の撮影があるんだ」

香苗「うわー、すごいね」

小夜「でも、お父さんはちょっと心配してる」

香苗「そうなんだ」

小夜「事務所に電話して、社長と話ししたんだって。納得したみたいだけど」

飛鳥「離れててもスゲー愛されてるじゃん」

小夜「ははは、だね」

香苗「楽しいでしょ、小夜ちゃん」

小夜「え、うん。わたしさ、子供のときからけっこういやらしい目で見られること多かったんだよね」

飛鳥「なにそれ」

小夜「分かるでしょ、スケベオヤジのそういうのって。なんかさ『こいつ絶対わたしの裸想像してる』みたいな視線」

香苗「いや、それは小夜だけが分かる感覚かも」

飛鳥「うん」

小夜「かなあ。そういうのもあってモデルの話しとか断ってきたんだけどさ——でも今はそんなの思うのつまんないなあっていうか。ランウェイ歩いてる時すごい気持ちよかったしさ」

香苗「うん。かっこよかったよ」

小夜「だから、『やってみたら』って言ってくれた美青には、すごい感謝してる」

香苗「——うん」

飛鳥「美青ってさ、こんなアイス一本まるまる食べたことないんだって」

小夜「そうなの」

飛鳥「うん。半分も食べたらダメなんだって。へぴノゝもさ、一日一個が限界だって」

小夜「二日へピノ〜一個が限界か——ね、今日美青は？」

香苗「病院。定期健診だつて」

小夜「そっか」

真紀「こらー、外野三人！ なにやってんの！ 練習しなさい！」

グラウンドの真紀を見る三人。

飛鳥「えっらそうに——真紀つてさ」

香苗「うん」

飛鳥「この前学食でカツカレー食べた後にへプッチンプリン〜食べて、それからシュークリーム食べて、最後にへピノ〜一箱食べたんだつて」

小夜「マジで」

飛鳥「うん。知恵がうんざりしながら言つてた」

香苗「ふつうお腹壊すよ、それ」

アイスクャンディーを食べ終え、立ち上がる三人。

飛鳥「真紀！ あんたの内臓四分の一でいいから美青にやれ！」

真紀「はあ？ なによそれ！」

笑いながらグラウンドに出ていく三人。

○真紀の家・彼女の自室

パジャマ姿で椅子に坐り、携帯電話で和樹と話している真紀。

真紀「——え、海？ 行きたい行きたい！ 行こうよ！ えっとね、

次練習ないのはね——え——明後日？ 明後日は無理だよ、練習

あるもん。練習ない日に合わせてよ——え——なんで、なんでそ

んなこと言うの和樹くん。そんな、どっち取るとか言わないでよ。

悲しくなっちゃうじゃんか——うん、うん。分かってるよ。うん、

うん。謝らなくてもいいよ——分かった。明後日、明後日にしよう。

練習は休む。一回くらいいいじょうぶだから。持つてるよ水着く

らい、かわいいやつ。スクール水着なんかで行かないよ！ もう、

和樹くんなに言つてんのお……」

○茜川高校・小運動場

練習をしている真紀以外のメンバー。キャッチボールをしている知慧と里菜。

里菜「今日コーチと先生は？」

知慧「コーチはスーパールの仕事がお昼からも入ったって。珠代ちゃんは今もうすぐ来ると思う」

里菜「そっか。誰が亡くなったんだっけ。真紀」

知慧「母方のおおおばさん」

里菜「おおおばさん」

知慧「うん。なんか子供のときよくかわいがってもらったんだって」

里菜「どこまで」

知慧「埼玉って言った。今晚にはもう帰ってくるって」

里菜「そっか」

○電車の中

並んで座っている真紀と和樹。

和樹「今日さ、帰るまで携帯の電源切っておかない？」

真紀「え、なんで」

和樹「昔ってさ、携帯なんかなかったわけじゃん」

真紀「うん」

和樹「それってさ、なんていうか、二人でいるときの時間が濃いつていうかさ」

真紀「うんうん」

和樹「誰にも邪魔されないっていうかさ」

真紀「うんうんうん」

和樹「——練習休めなんて言って、マジでごめん」

真紀「いいんだよ、もう」

和樹「無理きいてくれてありがとう。スゲー嬉しい」

真紀「和樹くん——」

和樹「今日は俺、真紀のことだけ考えてたいんだ」

和樹をじっと見つめる真紀。

真紀「今のヤバイよ」

和樹「ヤバかった？」

真紀「うん、激ヤバ」

携帯を取り出し電源を切る真紀。

真紀「わたしも今日は和樹くんのことだけ考える」

和樹「ありがとう」

和樹も携帯電話の電源を切る。見つめあい、手を握る二人。

真紀「あっ、海だっ！」

窓外に見え始める海。

真紀「海だよ、和樹くん！」

和樹「分かっているよ言わなくて。見えてるんだから。今から

海行くんだし」

真紀「もう、和樹君全然わかってない！ わたし今感動してんのに！」

和樹「感動してるのか」

真紀「そうだよ！ 和樹ちゃんと海見れて感動してるの！」

いっそう強く和樹の手を握る真紀。

○茜川高校・小運動場

美青の周りに集まっているメンバー。一人一人にプリントを手渡していく美青。

美青「試合や練習見てて、気づいたことをまとめてみたの。それぞれの課題や、こうやった方がいいんじゃないかなんてことが書いてある。意識して練習してくれたら嬉しい」

プリントに目を落とす誰も。

知慧「美青が一人で、全員のを？」

美青「もちろん園内コーチに見聞きながらだけど」

沙月「でも、ひとりでもまとめたんでしょ。すごい」

美青「やってて楽しかったよ。しばらくちよっと夜更かししちゃった」

香苗「――わたしこれ、一生とっておく」

美青「香苗」

飛鳥「確かに一生ものだわ、これは」

知慧「真紀のもの？」

手にした真紀へのプリントを見せる美青。

美青「うん、明日渡す。ちなみに真紀のがいちばん書いてあること

多い。みんなのは二枚だけど、真紀のは五枚」

知慧「課題だらけ」

美青「それもあるけど、キャッチャーはやっぱり多くなるんだ」

知慧「頭の中整理できなくて、絶対半泣きになるよあの子」

笑う誰も。

○海

砂浜の上、入念に日焼け止めクリームを顔や腕に塗る真紀。

和樹「別にいいじゃんか、そんなの」

真紀「よくないの！ 焼きたくないし。それにお葬式行ってること
になってるんだから、日焼けして帰ってきたらおかしいでしょ」

苦笑する和樹。

×

×

×

●水着姿で手をつなぎ砂浜を駆ける二人。

●海の中、和樹に手を引かれ楽し気にバタ足をする真紀。

●海の家でカレーライスを食べる二人。

○茜川高校・小運動場

知慧がノックを打っている。ベンチに座り、ノートをとりながらその様子を見ている美青。その体がゆらゆらと揺れる。
前のめりになり地面に突っ伏す美青。

知慧「美青っ！」

気づいた裕美が駆け寄る。驚いた誰もが駆け寄る。

裕美「美青、しっかり！」

美青を膝の上に乗せる裕美。白目を向いて意識を失っている美青。

そこへやってくる珠代。

珠代「どうしたの！」

知慧「先生、美青がっ！」

美青を見て驚く珠代。

珠代「救急車！ 誰か携帯で救急車呼んで！」

意識を取り戻さないままの美青。

○海

砂浜に手を繋いで並んで座り、海を見ている真紀と和樹。

和樹「最高だね」

真紀「うん、最高

和樹「来てよかった？」

真紀「え？ 当たり前じゃん」

和樹「水着、スゲー似合ってる」

真紀「ありがとう——って見すぎ」

和樹「それは、仕方ない」

真紀「もう——ねえ、もうちょっと泳ごうよ」

和樹「うん」

手を繋いだまま立ち上がる二人。

○茜川高校・小運動場

救急車が着ている。後ろの扉が開きストレッチャーに乗せられ中に運ばれる美青。珠代も乗り込む。

珠代「お母さんには連絡したから。あなたたちは一旦家に帰りなさい」

知慧「いやです！ 病院分かったら電話ください！ みんなで後から行きます！」

珠代「——分かった。気をつけてくるのよ」

走り出す救急車。しばらくして知慧の携帯電話がなる。

知慧「はい！ 総合病院ですね！ 分かりました」

里菜「真紀に連絡は？」

知慧「してみる。お葬式の最中かだから電話に出られないかもだ
けど。メールもしてみる。ねえ、タクシー呼んでみんなで行こ
う」

頷く誰も。

○総合病院・救急搬送口

救急車が止まる。ストレッチャーに乗せられて意識を失った
ままの美青が降りてくる。続いて珠代も。院内へ搬送される
美青。

○前同・正面入り口

タクシーが三台止まる。それぞれのドアが開き知慧たちが降
りる。走って病院の中へ入る九人。

○電車の中

手をつなぎ寄り添い、頭を寄せて眠っている真紀と和樹。

○路上／真紀の家の前

手を繋ぎ歩いている二人。真紀の家の前まで来て立ち止まる。

和樹「じゃあ」

真紀「うん——今日は楽しかった、ほんとに」

和樹「うん——」

周りを見回す和樹。人影がないことを確認して。

和樹「真紀」

真紀に顔を寄せる和樹。

真紀「え——」

両肩を掴み引き寄せ、口づける和樹。受け入れる和樹。

キスを終えて二人。

和樹「海でしたら、よかったかな」

真紀「——ううん」

和樹「また行こうな、海」

真紀「うん」

和樹「じゃ」

真紀「うん——和樹くん」

和樹「ん？」

真紀「大好き」

和樹「——俺も」

真紀「うん。じゃ」

和樹「うん」

二人、軽く手を振りあう。去っていく和樹の背を見送っている真紀。その姿が見えなくなってから、家に入る。

真紀「ただいまー」

×

×

×

玄関から飛び出してくる真紀。走り出す。

○大通り

走ってくる真紀。タクシーを止めようとするが見当たらない。

真紀「美青……美青……」

泣き顔の真紀。携帯を取り出す真紀。操作し、耳に当てる。

〈おかけになった電話番号は、電源が入っていないか、電波の届かないところにあるため、つながりません〉のメッセージが届く。

路上にうずくまる真紀。

(第四話・了)